

子育てコラム 44

性教育(命の教育) その8 「性犯罪から子どもを守る」

性教育は生きる心と力を育てる教育です。自分の心と体を知り、身を守ることを子どもたちに伝えていきましょう。

大人とはぐれて迷子になった、知らない人に声をかけられた、体を触られそうになった、そのような時どうしたらいいかを具体的に教えることは大事です。性被害や誘拐について話すことは子どもに恐怖心を与えるだけだし、大人不信になるのではないかと思われる方もいますが、現実には日々幼少児が犯罪に巻き込まれています。被害に遭わないため、そして万が一被害に遭ったときどうしたらいいかを親子で話し合い、日頃から教えておく必要があります。

ではどのような話をしたらいいでしょうか。さまざまな場面を想定して具体的に話すことは難しいものです。絵本「とにかくさげんでにげるんだ わるい人から身をまもる本」(ベティー・ボガホールド作, 安藤由紀訳/岩崎書店)には、デパートで迷子になったら、公園で知らない人に声をかけられたら、親戚のおじさんにいやなことをされたらなど、6つの物語化された場面でどのように自分の身を守ればいいのかを子どもたちに分かりやすく伝えています。子どもが犯罪に巻き込まれるのをどうやって防ぐか、そのような状況でどのような行動をとったらいいか。親の対応や何かあった場合にどこへ相談したらいいかも書かれています。

「イヤ」を伝えられること。逃げること、叫ぶこと。そして身近な大人に話すこと。あらゆる場面を想定して、叫ぶことや逃げることの練習もしておきましょう。大声をあげたら加害者を興奮させてよけい危ない目にあうのではないかと心配される大人も多くいますが、声は出さなければなりません。

このような絵本を親子で読みあい、共に考え、自分を守る力をつけてほしいものです。本のあとがきには、おうちの方から子どもたちに教えてほしいことも載っています。そして「話し合うことが予防の力になる。このようなことを親と話ができる子どもは被害に遭いにくく、自分を守れる子どもだということです」と書かれています。何でも話し合える関係は、子どもにとっての安全基地なのです。

私たち大人は、子どもたちが安心して自由に生活できるような社会をつくっていかねばなりません。そして子どもたちから信頼される大人にならなければと心から思います。